

【研究ノート】

人類史における「音」の文化制度化の研究

—日本列島から出土した音響発生器具における考古学的検討を例にして—

荒山千恵

1. はじめに

人類史において人工的な「音」を操作する行為が認められるようになるのはどのような歴史的状況においてであろうか。このような人間と「音」との関わりについての問いかけは、民族音楽学、音楽史学、音楽心理学など、さまざまな分野に通じる共通テーマとして議論・研究がすすめられている。中でも、無形である「音」を対象とする上で、文字資料に乏しく録音技術の存在しない過去の「音」と人との関わりをどのように再構成し得るのかという方法論的課題は、分野間を越えた模索が必要であることは言うまでもない。本稿では、その一つとして日本列島を対象とした考古学的アプローチについて紹介し、特に、規格性¹のある音響発生器具が出現・展開する過程を、「音」の文化制度化²という点から検討する。

2. 「音」の考古学としてのアプローチ

2-1. 問題の所在と用語設定

本論に入る前に、本研究で使用する用語について触れておく。本稿では、「音」と人との関わりについての考古学的アプローチを、『音』の考古学と呼ぶ。もちろん、「音」と人との関わりを広義に「音楽」という視点から議論することもできるが、ここであえて「音」としたのは、過去の「音」と人との関わりを考古学的に解釈する上で、我々の「音」文化の概念である「音楽」という枠組みを前提として捉えることに危惧するからである。同様に、本稿では「音」を発するための道具を「音響発生器具」と呼んでいる。一般的に呼称される「楽器」という用語を広義に捉えることもできるが、我々が「楽器」と呼ぶ概念として、無意識的にも「音楽」を奏でるための道具という認識を持ち合わせやすい。人類史において、文化的規範によって「音」を操作し、歴史的に達成してゆく過程を明らかにしようとするならば、文化制度化された「音楽」や「楽器」を前提とする枠組みから放れ、より客観的かつ包括的な枠組みの中で問うてみることも必要である。「音」の復元的・実験的研究は別として、無形である過去の「音」そのものを分析対象として扱うことが困難な考古学的アプローチを『音』の考古学と呼ぶのは、以上のような問題の所在に起因するためである。

2-2. 「音」の考古学における留意点

考古資料を対象に過去の「音」文化を再構成していく上では、音響発生器具の発見率や残存度の問題、機能・用途の認定問題など、考古学的に把握し得る「音」と人との関わりが限定的であることに留意する必要がある。とくに、考古資料における機能・用途の認定では、民族音楽学のように人間が「音」を発する行為を直接観察することができないため、我々の知り得ない音響発生器具の機能・用途や使用方法・転用方法を推定することは容易ではない。しかし、限定的でありながらも、考古学的現象として製作技術や形態に規格性をもつ音響発生器具が一定の時間幅と空間的な広がりをもって認められるようになることは、「音」の文化制度化過程を示す重要な手掛かりであると考えられる。そこで、以下に日本列島において規格性のある音響発生器具の候補として議論される3種の考古資料について紹介する。

3. 資料紹介

3-1. 気鳴系の候補—埴形土製品

第1に、気鳴系の候補として埴形土製品（別名：陶埴、土笛）がある（図1-a、図1-b）。埴形土製品は倒卵形を呈し、中空で、直径2~3cmの開口部、一方の器面に4孔、その反対側の開口部よりに2孔の穿孔がある。山口県下関市綾羅木郷遺跡からの出土が最初の発見であり、国分直一が「中国古代の陶埴にその形と指孔の状況が酷似している」（国分1968：190）と指摘、以来「陶埴」や「土笛」として紹介されるようになった（図1-c）。現在までに発見された総個体数は100点程になる。帰属時期は弥生前期前葉から中期前葉³、分布は東端を丹後半島、西端を九州北部とする日本海沿岸域において発見されており、時空間ともに限定的な様相を示す（図1-d）。問題となるのは、「土笛」を想定した際に吹き口となる開口部面積が広すぎるために、単に吹いても「音」が鳴らない、あるいは鳴りにくい点である。先行研究においても発音機能が問題とされてきた（国分1979、西岡1984、江川1997、東山2000など）。近年では、発音方法の工夫により、例えば開口部面積を両方の親指で左右から狭め、そこに息を吹き込むことで「音」を鳴らすことを可能とする指摘がある（山田1998ほか）。しかし、多様な形態や大きさの埴形土製品において、指向位置と吹き口を狭める操作上のバランスや、粘土という可塑性に富んだ素材を用いているにもかかわらず製作段階における音を鳴らすことへの配慮という点には疑問が残る。その中で、新たに注目されるのが、長崎県壱岐郡原の辻遺跡から出土したココヤシとの類似である（近藤1999ほか）（図1-e）。原の辻遺跡から出土したココヤシは1点が弥生中期、もう1点が弥生後期に帰属する。埴形土製品より若干時期が下るものの、外面形態や開口部をはじめ、底部の尖らせた表現、ココヤシ内果皮の筋に類似した埴形土製品の縦走文（沈線文または突帯文）など、具体的な類似点を明確に認めることができる。ココヤシは日本列島に自生するものではないが、南方より海流によって日本列島に漂着し、その漂着分布の1つが山陰を中心とした日本海沿岸域にあることが確認されており（中西1990、杉村・松井1998）、埴形土製品の限定的な分布に重複する点は注目される。また、現在のところ朝鮮半島において埴形土製品の出土が知られていないことから、埴形土製品が大陸由来によるものではなく、日本海沿岸に漂着したココヤシの内果皮を模倣した可能性が高い。課題となるのは、漂着ココヤシを模倣した埴形土製品の機能・用途である。模倣の対象と推察された原の辻遺跡にみるようなココヤシ内果皮を「笛」に用いたとする確証は現段階のところ得られていない。原の辻遺跡出土のココヤシには複数の貫通孔が認められる。これらの孔のうち、開口部寄りの2孔については退化した発芽孔の跡である可能性があり、埴形土製品に穿たれた開口部寄りの2孔がこれに対応しているように見受けられる。原の辻例のココヤシに認められるその他の孔の位置や数については、埴形土製品に認められる孔の規則的な配置を認め難い。また原の辻例に認められる穿孔そのものが人工的に穿たれたのか、それとも漂着する過程に生じたものかという点も問題である。古代中国の陶埴との類似から「笛」説が提唱された埴形土製品であるが、原の辻遺跡にみるココヤシの機能・用途、漂着ココヤシと埴形土製品との関係など、今後も検討を要するところである。

3-2. 打鳴系の候補—「鐸」

第2に、打鳴系の候補として「鐸」（open-mouth bell）がある。日本列島では、弥生文化に金属製の銅鐸・小銅鐸・馬鐸の出土が確認されている。ただし、馬鐸の普及は古墳文化においてである。また、金属製の「鈴」（closed bell）の普及も古墳文化以降においてである。弥生文化に盛行する「鐸」は、銅鐸および小銅鐸であり、その原型は大陸に由来し、朝鮮半島を経由

して伝えられたものと推察されている（春成 2004 ほか）。

銅鐸は、文献記述を含めて 600 個体を越える数が知られている（井上 2003）。田中琢が『聞く銅鐸』から『見る銅鐸』へ（田中 1970 : 50）と表現したように、時間的変異に伴い規格性を保ちながら大型化・装飾過多へと祭器として発達することが知られている（図 2-1-f）。「聞く銅鐸」に該当する古段階の銅鐸では総高 20cm 程度の小型の例も認められるが、大型化・装飾過多となる「見る銅鐸」の段階には総高が 1m を越えるものもある。また、銅鐸の用途については、農耕祭祀の祭器であった可能性が高い（佐原 1960、春成 2004 ほか）。一方、小銅鐸については、現在確認されている総個体数は 53 点であり、銅鐸の発見数に比べて少ない。大きさは、大型の例においても 15cm 未満におさまり、最も小さな例では総高が 4cm 未満になる（図 2-2-g）。ここで注目したいのは、小銅鐸のすべてが銅鐸の小型品（以下、銅鐸小型品と記す）という位置づけには留まらないことである。とくに、銅鐸が祭器性を高めて装飾過多・大型化となる中で、小銅鐸には銅鐸のような装飾性をもたず音響発生器具として使用されたものが認められる。それらの中には、出土状況において墓に伴う事例が複数確認されており、銅鐸が副葬に用いられなかった点とは対照的である（図 2-2-h）。集落内祭儀において葬送儀礼での使用が認められた小型のベルの性格は、銅鐸や銅鐸小型品とは異なるものであり、「小型青銅製ベル」と呼び分けたい（荒山 2008）。

弥生文化に出現・盛行した「鐸」であるが、祭器として発達した銅鐸は弥生文化の内に終焉を迎え、銅鐸小型品と小型青銅製ベルは古墳前期に終焉を迎える。なぜ、祭器として発達した銅鐸やその小型品に留まらず、葬送を含む儀礼用ベルとして使用された小型青銅製ベルさえも存続しなかったのであろうか。おそらくは、集落内祭儀の「祭祀具」という位置づけにあった小型青銅製ベルを「音楽」的な概念へと転換し、「楽器」として継承する範疇を持ち合わせるには至らなかった。そのため、古墳文化における新たな祭儀形態が確立してゆく中で、小型青銅製ベルは音響発生器具として後続する文化に受け入れられなかったことが考えられる。

3-3. 絃鳴系の候補—「琴」

第 3 に、絃鳴系の候補である「琴」がある（図 3-i）。日本列島では、弥生前期末葉～中期頃より櫛歯状の突起をもつ琴板の出土が認められるようになる。櫛歯状の突起をもつ「琴」（以下、櫛歯状の「琴」と記す）は、人物埴輪に表現された「琴」、さらには雅楽の楽器の 1 つである「和琴」にも認められる特徴であり、弥生文化において既にこれらに共通する特徴をもつ「琴」が製作・使用されていたことになる。櫛歯状の「琴」の出現と系譜に関しては、その祖形を縄文後・晩期期に既存の籠形木製品（図 3-j）に求める見解（鈴木 1978 ほか）と、弥生文化の段階に大陸から流入したとする見解（水野 1980 ほか）とがある。ここで注目したいのは、櫛歯状の「琴」の初現期である弥生中期の分布状況である（図 3-l）。日本海沿岸域や畿内への流通ルートと考えられる瀬戸内海沿岸域に位置する遺跡からの出土が目立つ。このような傾向においては、弥生文化の段階に大陸から完成された「琴」が伝えられた可能性が高いと考えられる。ただし、日本列島から出土する櫛歯状の「琴」と大陸の箏琴類との具体的な系譜関係は明らかではなく、課題とするところである。一方、籠形木製品については、それ自体の機能・用途が問題であり、先行研究では絃楽器説と織具説が有力視されている。絃鳴系音響発生器具の機能を想定する場合、滋賀県松原内湖遺跡から出土した籠形木製品 2 点のうち大型の例において、一端に 2 本の突起をもち、剣身状の先端に 4 つの横列する小孔が認められることから、4 絃を張る絃鳴器具を想定させる例として注目される（図 3-j）。先端に複数孔をもつ籠形木製品の出土は現在のところ 1 点のみであるが、他にも先端に単孔や溝状の痕跡を残すものが確

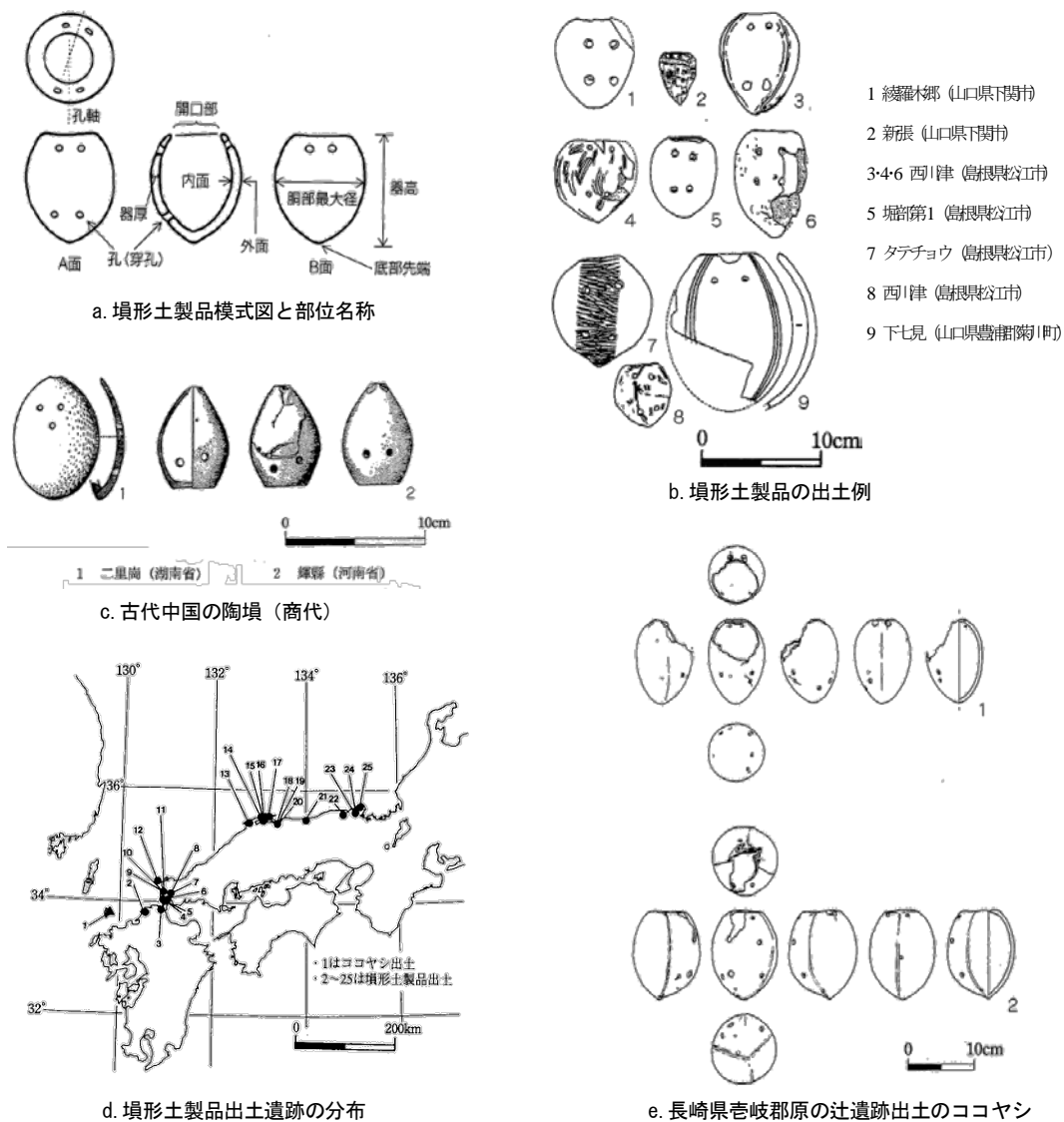


図1 気鳴系の候補—埴形土製品について

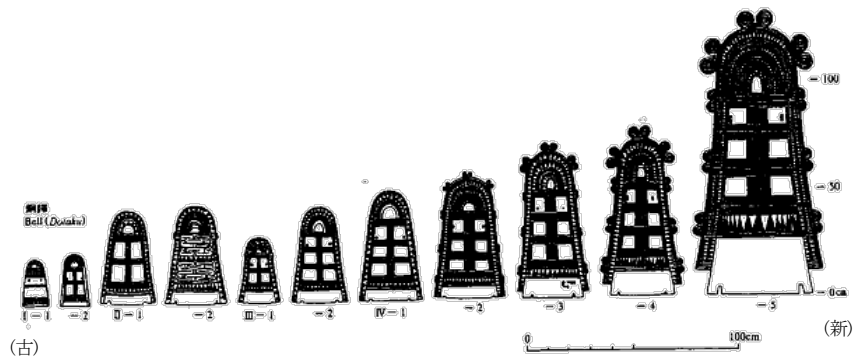
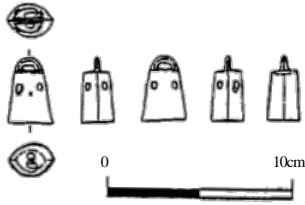
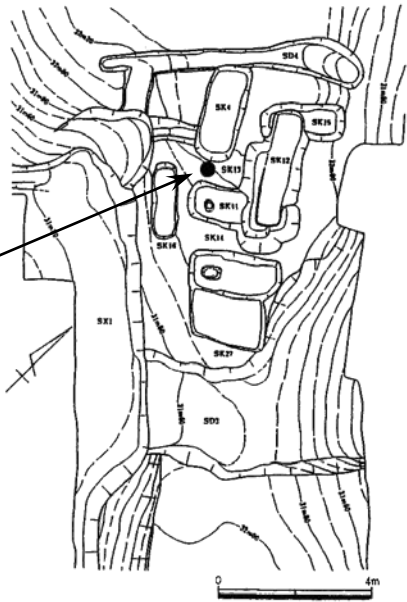
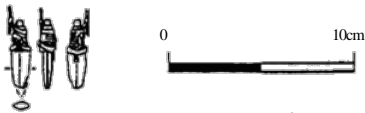
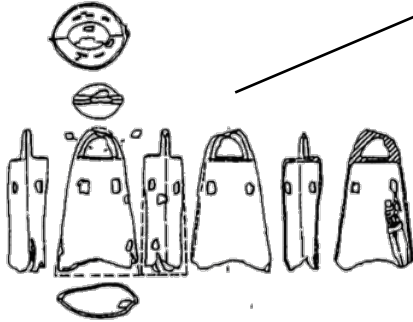


図2-1 打鳴系の候補—「鐃」について



滋賀県 下鈎遺跡／弥生中期後葉～後期

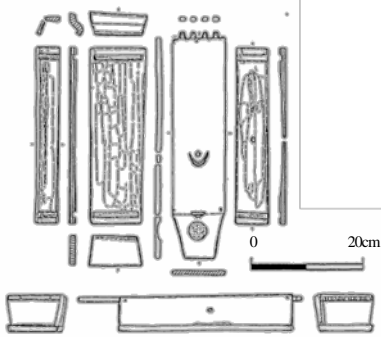
g. 列島出土で最も小さな小銅鐸



静岡県 愛野向山II遺跡／弥生終末

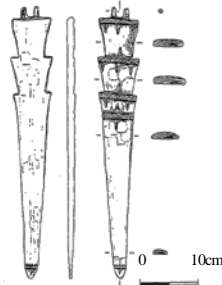
h. 墓に伴う小銅鐸(小型青銅製ベル)の出土例

図2-2 打鳴系の候補—「鐸」について



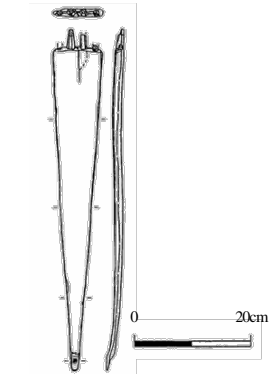
鳥取県 青谷上寺地遺跡／弥生中期

i. 櫛歯状の「琴」



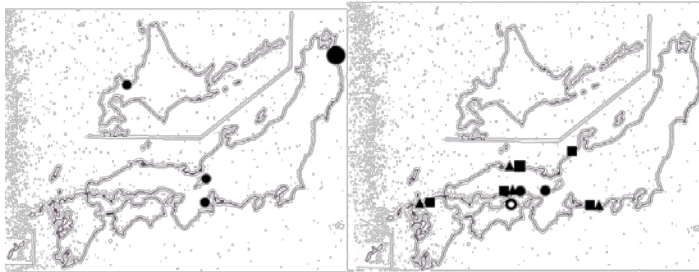
滋賀県 松原内湖遺跡／縄文晩期

j. 籠形木製品



香川県 井手東I遺跡／弥生中期

k. 平面形態が剣身状で4本の突起をもつ木製品



縄文後期～弥生前期

弥生前期末葉～中期(後期前葉)

l. 籠形木製品と櫛歯状の「琴」の分布

凡例

● 籠形木製品

○ 井手東I

▲ 櫛歯状の「琴」(共鳴槽なし)

■ 櫛歯状の「琴」(共鳴槽あり)

図3 絃鳴系の候補—「琴」について

認められている。篋形木製品の形態や大きさにおける個体差の問題、使用法の問題など、依然として検討の余地は残されているが、絃鳴系としての機能を想定することは可能であると推察される。また、剣身状を呈する篋形木製品の大半は突起数が2本であるが、弥生中期には香川県井手東I遺跡例のように剣身状を呈し一端に4本の突起をもつ例もある⁴ (図3-k)。櫛歯状の「琴」の出現によって、篋形木製品に想定される2突起4絃から4突起4絃をもつものが生じた可能性も考えられよう。類例の増加を期待しながら今後も検討が必要である。

4. 日本列島における規格性のある音響発生器具の出現と展開

気鳴系・打鳴系・絃鳴系の音響発生器具の候補となる3種の考古資料として、埴形土製品・「鐸」・櫛歯状の「琴」を紹介した。これらの日本列島における出現は、何れも弥生文化に認められ、その系譜は3種ともに縄文文化に求められるのではなく、弥生文化の段階に出現したものと推察した。これら3種の初現期を比較すると、埴形土製品が弥生前期前葉には出土が認められ前期末葉を盛期とするところから、弥生中期ないしは前期末葉を初現とする「鐸」や「琴」に先行することになる。もし、埴形土製品が気鳴系音響発生器具であるならば、「鐸」や「琴」に先行して製作・使用された規格性のある音響発生器具ということになる。しかし、新たに浮上した漂着ココヤシとの関係をはじめ、先行する音響発生器具と認めることには保留にする必要がある。現段階において、日本列島において規格性のある音響発生器具が出現・普及したのは、西南日本を中心とした弥生中期ないしは前期末葉を初現とする「鐸」と櫛歯状の「琴」においてであると考えられる。

多様な「音」と人との関わりが想定される中で、弥生中期以降に「鐸」と「琴」を受容し、列島独自の製作・使用へと展開したことは、「音」の文化制度化過程として重要な現象である。当該期において縄文文化には存在しなかった金属音を打ち鳴らす「鐸」、多絃をはじき鳴らす「琴」を祭儀に導入したことは、縄文文化における「音」文化に比べて音量・音色・音程が多様になったことを示すものであり、人工的な「音」に対する認識に大きな変化が生じたことが推測される。弥生文化における「鐸」と「琴」にみる規格性のある音響発生器具の出現は、列島の「音」文化における大きな変革期であったと言える。

5. おわりに

日本列島では奈良・平安時代において楽制の整備された「音楽」文化が確立してゆく。それらが確立する以前の「音」文化について、どのような「音」の文化制度化があり音響発生器具の受容と展開があったのか、依然として未解明なところが大きい。その中で、弥生中期における「鐸」や「琴」の出現・普及を通じて音量・音色・音程が多様化する変革期を迎えたことが推測された点は、考古学的アプローチの成果の1つといえる。

本稿では、人類史における「音」の文化制度化という観点から、そのアプローチとして日本列島から出土した音響発生器具の考古学的検討について記してきた。本稿の論点では、規格性のある音響発生器具の出現を焦点とし、限られた議論に留まるものであった。大陸文化との関係や「音」に対する認識の問題などを文献史学や民族音楽学などの関連する分野と課題を共有し、今後も「音」の考古学としての議論・研究を深めてゆきたいところである。

謝辞

本稿は、2007年度北海道民族学会第2回研究会（2007年12月16日開催、於北海道大学）での口頭

発表「人類史における「音」の文化制度化の研究—日本列島出土の音響発生器具を例にして—」をもとに作成した。研究会では、会場の方々より多数のご質問・ご教示を、柘谷隆男氏からは貴重なコメントを頂いた。本研究の実施に当たっては、関連資料の実見において諸機関ならびに担当者の方々に大変お世話になった。津曲敏郎先生、佐々木亨先生には口頭発表ならびに本稿作成の機会を頂き、日頃の研究では小杉康先生よりご指導頂いた。無論、本稿にある誤りは筆者に帰するものである。末筆ながら深く感謝申し上げます。

付記

本研究は、筆者に交付された高梨学術奨励基金平成 18 年度研究助成、平成 19 年度笹川科学研究助成による成果の一部である。

〔註〕

- 1 ここでいう規格性とは、音響発生器具の製作技術や製作工程、形態的特徴においてである。
- 2 文化制度化という呼称について、小杉康は、「性向、性向に基づく行為、行為によって生じる効果、これらを一定の方式に従い秩序立てることを、〈文化制度化〉あるいは〈制度化〉と呼ぶことにする」（小杉 1988 : 108）としている。また、矢野暢は論考「制度としての音楽」において、「制度化」を「秩序化」・「規範化」・「意味性の付与」という三要素によって捉えている（矢野 1988 : 304-319）。本稿では、文化的規範によって歴史的に達成されていることを指して使用する。
- 3 本稿で使用している編年（例：弥生前期、弥生中期など）については、日本列島内における考古学的な相対年代を示すものとして使用している。なお、弥生時代の年代観について、従来、その開始年代は B.C.450 年頃に設定されていたが、近年の研究では九州北部の年代観においてそれを大きく遡る設定も提示されている（藤尾 2004 ほか）。
- 4 本稿執筆後、香川県多肥松林遺跡において、井手東 I 遺跡例のように剣身状を呈し 4 本の突起をもつ木製品が出土していたことを確認した。香川県埋蔵文化財調査センター編 1999 : 69 (800) 参照。

挿図表出典

- 図 1 a : 筆者作成 b : 1 下関市教育委員会 1981、2 山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター 2000、3 島根県教育委員会 2000、4 島根県土木部河川課 1989、5 鹿島町教育委員会 2005、6 島根県土木部河川課 1989、7 島根県土木部河川課 1990、8 島根県土木部河川課 1989、9 山口県埋蔵文化財センター 1989 c : 1 河南省文化局文物工作队第一隊 1957、2 中国科学院考古研究所 1956 d : 筆者作成 e : 1 長崎県教育委員会 1988、2 長崎県教育委員会 2003
- 図 2 f : 春成 2004 部分転載を加筆・改変 g : 滋賀県教育委員会 2003 h : 松井 1989
- 図 3 i : (財) 鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター 2002 j : 細川 1987 k : 高松市教育委員会・建設省四国地方建設局 1995 l : 筆者作成

引用・参考文献

相京邦彦

1995 「東日本における『小銅鐸』の終焉」『古代文化』古代学協会、47-10

荒山千恵

2005 「筑形木製品の研究」『研究論集』北海道大学大学院文学研究科、5

2006 「埴形土製品の研究」『研究論集』北海道大学大学院文学研究科、6

2007 「籠形木製品について」『北海道考古学』北海道考古学会、43

2008 「人類史における「音」の文化の考古学的研究—日本列島から出土した音響発生器具を対象として—」平成 19 年度博士論文、北海道大学大学院文学研究科

石守 晃

1980 「原始・古代楽器の考古学的一研究」『長野県考古学会誌』長野県考古学会、37

井上洋一

2003 「銅鐸」『考古資料大観』小学館、6

上原真人

1993 「J 楽器」『木器集成図録』近畿原始 篇 奈良文化財研究所

江川幸子

- 1997 「弥生の土笛」『古代文化研究』島根県古代文化センター、5
 荻美津夫
- 2007 『古代中世音楽史の研究』吉川弘文館
 (財)香川県埋蔵文化財調査センター 編
- 1999 『多肥松林遺跡』高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊
 笠原 潔
- 2004 『埋もれた楽器』春秋社
 鹿島町教育委員会 編
- 2005 『堀部第1遺跡』鹿島町福祉ゾーン整備事業に伴う調査1
 金沢市 編
- 1992 『金沢市西念南新保遺跡Ⅲ』金沢市教育委員会
 光谷拓実
- 2007 「年輪年代法と歴史学研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』137
 国分直一
- 1968 「陶埴の発見」『日本民族誌と南方文化』金関丈夫博士古希記念論文集 平凡社
 小杉 康
- 1988 「縄文時代の時期区分と縄文文化のダイナミクス」『駿台史学』駿台史学会、73
 近藤直美
- 1999 『日本の陶埴—最新情報に基づく報告』(第64回日本音楽学会関東支部・東洋音楽学会合同例会における発表資料)
- 佐原 真
- 1960 「銅鐸の鑄造」『世界考古学大系』日本Ⅱ 平凡社、2
 1983 「銅鐸の始まりと終わり」と『展望アジアの考古学』樋口隆康教授退官記念論集 新潮社
 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 編
- 2003 『下鈎遺跡』栗東市下鈎・苅原中ノ井皮放水事業に伴う発掘調査報告書1
 島根県教育委員会 編
- 2000 『西川津遺跡Ⅶ』朝酌川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12冊
 島根県土木部河川課、島根県教育委員会 編
- 1989 『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
 島根県土木部河川課、島根県教育委員会 編
- 1990 『朝酌川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告Ⅲ』
 下関市教育委員会 編
- 1981 『綾羅木郷遺跡発掘調査報告書第1集』
 杉村順夫・松井宣也
- 1988 『ココヤシの恵み』裳草堂
- 鈴木克彦
- 1978 「縄文琴について—日本最古の琴」『青森県立郷土館だより』9-2
 高松市教育委員会・建設省四国地方建設局 編
- 1995 『井手東Ⅰ遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第26集
 田中 琢
- 1970 「「まつり」から「まつりごと」へ」『古代の日本』5 近畿 角川書店
 (財)鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター 編
- 2002 『青谷上寺地遺跡4』(本文編2)鳥取県教育文化財団調査報告書74
 長崎県教育委員会 編
- 1998 『原の辻遺跡』下巻 原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
 長崎県教育委員会 編
- 2003 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集
 中西弘樹
- 1990 『海流の贈り物』平凡社
- 西岡信雄
- 1984 「埴の器形と奏法」『大阪音楽大学音楽研究所年報』2

- 春成秀爾
2004 「日本の青銅器文化と東アジア」『国立歴史民俗博物館研究報告』119
- 東山喜一
2000 「弥生の土笛—その起源と変遷」『古事』天理大学考古学研究室第4冊
- 比田井克彦
2001 「関東における小銅鐸祭祀について」『考古学雑誌』日本考古学協会、86-2
- 藤尾慎一郎
2004 「新弥生年代の試み」『季刊考古学』雄山閣、88
- 細川修平
1987 「滋賀県松原内湖遺跡出土の筥状木製品」『考古学雑誌』日本考古学協会、72-4
(財)北海道埋蔵文化財センター 編
1989 『小樽市忍路土場遺跡・忍路5遺跡』第4分冊 (財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第53集
- 松井一明
1989 「静岡県袋井市愛野向山Ⅱ遺跡出土の小銅鐸」『考古学雑誌』日本考古学協会、75-2
- 水野正好
1980 「琴の誕生とその展開」『考古学雑誌』日本考古学協会、66-1
- 矢野 暢
1988 「制度としての音楽」『岩波講座 日本の音楽・アジアの音楽』成立と展開 2、岩波書店
(財)山口県教育財団、山口県埋蔵文化財センター 編
2000 『新張遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第20集
山口県埋蔵文化財センター 編
1989 『下七見遺跡Ⅰ』菊川町教育委員会
- 山田光洋
1998 『楽器の考古学』同成社
- Hornbostel, Erich M. Von and Curt Sach. Translated by Anthony Baines and Klaus P. Wachsmann
1961 Classification of Musical Instruments. *The Galpin Society Journal*. 14. (1914 Systematik der Musikinstrumente. in *Zeitschrift für Ethnologie* 46.)
- Hughes, David W.
1988 Music Archaeology of Japan : data and interpretation. *The Archaeology of Early Music Cultures*. (Third International Meeting of ICTM Study Group on Music Archaeology.) Verlag für Musikwissenschaft GmbH, Bonn.
- Price, Percival
1983 *Bells and Man*. Oxford Press.
- 陳重
1989 「墳」『中国大百科全書』音楽 舞踏 中国大百科全書出版社
河南省文化局文物工作队第一隊
1957 「鄭州商代遺址の発掘」『考古学報』第1期
- 李純一
1964 「原始時代和商代的陶墳」『考古学報』第1期
- 李純一
1996 「第十五章 墳」『中国上古出土楽器総論』文物出版社
- 張師勛
1969 『韓国楽器大観』韓国国楽学会
中国科学院考古研究所 編
1956 『輝縣発掘報告』中国田野考古報告書第1号 科学出版社
中国芸術研究院音楽研究所
1988 『中国音楽史図鑑』人民音楽社出版社

(あらやま・ちえ／北海道大学)